

プレアクト情報

■アクトトレーラー

トーキョーN◎V A。

様々な人々の欲望や信念が渦巻く、混沌の街。

N◎V Aを代表する、偉大なニューロビート・アーティストの死。それは、この街のあり方を変容させる程の、巨大な事件の幕開けにすぎなかった。

混乱を極める街。雲を掴む様な捜査線。

事件の裏に隠された、一つの思惑。

この街の混沌を愛した男の曲は、彼の死後も街中に響き続ける。その想いを歪められて。

トーキョーN◎V A The Detonation

『ニューロビート・ユビキタス』

かくして、運命の扉が開かれる。

これは、この街を愛する人々に捧げる旋律。

■シナリオ情報

▼推奨プレイ環境

Skype、オフを推奨。

▼プレイ時間

4～6時間

▼プレイヤー人数

4人推奨

▼シナリオ傾向

捜査もの、ニューロビート、社会派

●レギュレーション

本誌に収録されているデータでの想定レギュレーションを以下に記載する。ただし、使用するデータの変更やRLが調整を行った場合、改めてレギュレーションを提示すること。

使用経験点：50～200点を想定

最大達成値：単独で20台後半、支援込みで30前半

■キャスト作成

プレアクトシート（アクトトレーラー、ハンドアウトなど）を参考にキャストを作成すること。

推奨スタイル：イヌ

SCENARIO HANDOUT

コネ：^{law-dog}“法犬”^{きりしま ひろみつ}霧島 宏充

推奨スト：理性

ニューロビート界のカリスマ、電龍（デンタツ）が、何者かに殺害されるという事件が起きた。それを皮切りに起きる異例の混乱……暴動、集団自殺、連続失踪。ブラックハウンドでは、異例の大規模捜査が行われ、君も捜査本部に参加することになった。事件の指揮を取るのは、公安部の“法犬”霧島宏充。彼は法と秩序を重んじる厳格な人物であり、独断専行の多い機動捜査課の君とは、何度か対立したことがあった。

【PS：電龍を殺害した犯人を逮捕する】

推奨スタイル：トーキー

SCENARIO HANDOUT

コネ：^{デンタツ}電龍

推奨スト：感情

この街を代表するニューロビートアーティスト、電龍。君は彼と交流のあった数少ない人間の一人だ。かのアマデウスに並ぶと言われるカリスマの本当の姿が、まるで巢穴の中で外敵に怯えるハリネズミのような男だという事を知っているのは、君ぐらいなものだろう。そんな彼が死んだ。その死に謎が多い事や、街に与えた影響の大きさから、メディア業界は騒然としていた。

【PS：電龍殺害事件の真相を追う】

推奨スタイル：フェイト

SCENARIO HANDOUT

コネ：^{こずえ み え り}梢 美恵理

推奨スト：理性

電龍殺害事件から連続して、ストリートで発生している電龍ファン達の集団失踪事件。この手の事件の後にはよくある話ではある。同業のフェイト達も、それらの捜索に駆り出されていた。しかし、君が探すべき失踪者はかなり特殊だ。電龍の恋人を名乗る盲目の女性からの依頼——「電龍を探してほしい」死んだ人間を、どう探せって言うんだ？

【PS：電龍を探し出す】

推奨スタイル：ニューロ

SCENARIO HANDOUT

コネ：“ソウル・フィクサー” 佐村 和哉

推奨スト：外界

ニューロキッズ達に多大な影響力を持っていた電龍の死は、契約企業であるCMEに大きな打撃を与えた。丁度彼は新作の発表を間近に控えていたらしく、彼曰く「今までで最も自信のある出来」だったのだという。しかし、完成していたはずの新曲データは、行方が知れなくなっていた。失われた新曲を探しだす。それが今回の君のビズだ。

【PS：電龍の新曲を探しだす】

●推奨スタイル

- ①『イヌ』：ブラックハウンド機動捜査課
- ②『トーキー』：記者、所属は問わない
- ③『フェイト』：探偵
- ④『ニューロ』：情報屋、ハッカー

●本シナリオについて

このシナリオは、ある程度N◎V Aの世界に慣れ親しんだプレイヤーを対象に書かれている。

初めてN◎V Aを遊ぶプレイヤーにはあまり向かないので注意してほしい。

●必要な神業

エクスボーズ トゥルース デウス・エクス・マキナ
《暴露》《真実》《電 脳 神》には使用想定シーンが存在する。

キャストが敵の神業のみでリタイアするのを防ぐために、2～3個以上(*)の防御系神業が必要だ。

R L用テキスト

■ストーリー

N◎V Aのニューロビート界を代表するアーティスト、デンタツ電龍が、何者かに電腦を焼き殺されるという事件が起きた。熱狂的なファンが多かったカリスマの死は、街に大きな混乱を巻き起こす。

その事件の裏側には、Law-Dog きりしまひろみつ“法犬”霧島宏充の率いるブラックハウンド公安4課の暗躍があった。彼らの目的は、犯罪の抑止が効かなくなったN◎V Aから混沌を払い、秩序をもたらす事だ。

デンタツ電龍はN◎V Aの混沌を象徴する様な曲を多く作ってきた。彼の作るニューロビートには、人々を無意識下に、反体制的な思想に向けさせるような、洗脳的な性質があった。霧島はこれを逆に利用し、N◎V Aの市民に“法を遵守する意識”を植え付けようとしたのだ。

彼らはデンタツ電龍を殺されたように見せかけ、そのブレインパックを奪取し、操る事で、歪められた新たなるニューロビートを作り出させた。それを「亡きデンタツ電龍が残した曲」という名目でメディアに乗せる事で、この街を変えようとしたのだ。

デンタツ電龍の素顔を知る数少ない人物である『トーキー』。デンタツ電龍の恋人であり、彼がまだ死んでいない事をおぼろげな

●主に使用する技能

本シナリオの情報収集で主に使用する技能は、〈社会：警察〉〈社会：メディア〉〈社会：ウェブ〉〈電腦〉などである。(*)

■キャスト間コネクション

キャスト間のコネは以下の通りに取得する。

『イヌ』→『トーキー』→『フェイト』→『ニューロ』→『イヌ』

◎ ◎ ◎

TXT4RULER

がらも感じ取ったこずえ み え り梢美恵理に、彼の搜索を依頼される『フェイト』。デンタツ電龍のプロデューサーから、彼の新曲データのサルベージを依頼される『ニューロ』。そして、半ば公安4課の自作自演の為に設けられたデンタツ電龍殺害事件の捜査本部に参加させられる事になった『イヌ』。

彼らが事件の裏側に隠された霧島たちの思惑に気づき、それを阻止する事ができれば、このシナリオは終了となる。

■クライマックスへの条件

事件の黒幕がブラックハウンド公安4課である事を突き止めたらクライマックス。

ゲスト情報

GUEST DATA

■^{デンタツ}電龍

カブキ、カリスマ◎、ニューロ●

▼設定

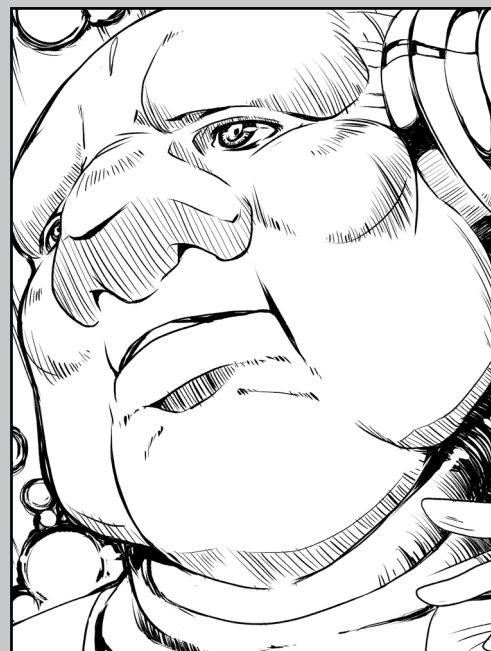
「どどど、どうかな、この曲……」

N◎VAを代表するニューロビートアーティスト。ニューロキッズを中心に熱狂的なファンを多くもつ。

人前に姿を現さないのが謎の多い人物だが、実の所、外界に怯える臆病なハリネズミのような男。“サヴァン症候群”であり、精神的に未発達な代わりに、常人には及びもつかない芸術的センスをもつ。

▼神業

チャイ□ 神の御言葉■ 電脳神■



■梢 美恵理

エキストラ（ミストレス◎）

▼設定

「彼……電龍は、私と同じで、どうしようもなく臆病な人なんです」

^{デンタツ}電龍の恋人。幼い頃の事故が原因で、視力を失い、電脳不適症であったため、サイバー治療も受けられなかった。ニューロエイジにおいては極めて珍しい全盲の女性。

代わりに聴覚が異常発達しており、更にウェットであるため、ニューロビートの陶醉感に惑わされることなく、^{デンタツ}電龍が曲に込めた想いを聴きとる事が出来た。

▼神業

^{デンタツ}電龍を救い出そうとするキャストに対して《ファイト！》を使用する。



■グリア・シュワン

エキストラ（タタラ◎）

▼設定

「頼む……電龍を、救ってやってくれんか」

電龍が幼い頃から、彼の面倒を見ていた義体技師。実親の居ない電龍の、親代わりのような存在。彼の精神発達障害の緩和のために義体処置を行っていたが、その途中、彼の中に並々ならぬ芸術センスを見出し、義体の力を持ってその能力をアシストしてきた。

▼神業

もしキャストが何らかの手段で、連行されたグリアを救う、あるいは社会戦ダメージを打ち消すなどした場合、彼は《タイムリー》をキャストの為に使用する。効果の内容や発動タイミングはプレイヤーの自由とする。



オープニングフェイズ

OPENING PHASE

●RLシーン：序曲

登場：キャストの登場不可

◆解説

事件の始まり。^{デンタツ}電龍が殺されるシーン（実際にはブレインパックを抜き取られるだけだが）。

◆描写

その男は、トロンに向かって無心に^{イントロン}没入していた。電腦空間に広がるのは、数千の光の^{ニューロシンセ}鍵盤。男が^{タップする}鍵盤を叩くたび、生まれるメロディ達が螺旋を描くように、曲の形を成していく。

「できた……やっとできた。これこそが、僕の作りたかった曲だ……！」

満足げに男が微笑む。しかしその瞬間、男の体に電流が走った。驚きに目を見開き、そのままドサリと倒れ込み、動かなくなる。

彼の背後に立っていた一人の男の姿が、画面に映し出される。その顔は逆光に隠れ、うかがい知れない。

「申し訳ないが、その曲は世には広まる事はありません。貴方の曲は、これからその姿を変えるのです——私たちの手によって」

◆結果

シーンの終わりに、何者かが《タイムリー》を使用する(*)。描写を終えたらシーンを閉じること。

●イヌ：踊る捜査線

登場：他のキャストの登場不可

◆解説

^{デンタツ}電龍殺害事件の捜査本部が設置され、『イヌ』も捜査を開始する。事件の大きさと街の混乱を描くシーンだ。

◆描写

ブラックハウンド基地内の大会議室。そこに、異例なほどの大規模な捜査本部が設置されていた。多岐に渡る部署での、合同捜査。

指揮を取るのは、背筋の張りつめた切れ目の男。公安部の警視監……^{Law-Dog}“法犬”霧島宏充だ。

▼セリフ：霧島宏充

^{デンタツ}「電龍が殺害されてから、街は混乱を極めている。各地でのファンの暴動、ストリートキッズ達の集団自殺、そして、未だ増え続けているファン達の連続失踪。速やかに、事態を鎮静化させる必要がある」

「犯人の特定・逮捕、暴動の鎮静化、不穏因子の監視、失踪者の搜索、報道管制……やるべき事は多い。皆さんの奮闘に期待する。では、総員、かかれ」

（隊員達が散った後、『イヌ』に対して）「機動捜査課の『イヌ』巡查。今回の事件はいつになく大規模なものだ。部隊全体でのチームワークが要求される」

「それは、犯人捜査のための遊撃担当である、君たち機動捜査課も変わらない。本部の指示を無視した独断行動は、くれぐれも謹むよう」

「個人的には、貴方の働きには期待している」(*)

◆結果

捜査費用は1ゴールドだ。イヌが捜査に向かったらシーン終了。

何者かの《タイムリー》

プロンプトが使用している。

なお、このシーン中で電龍の脳を焼いたのは、グリア・シュワンをゴーストハッキングで操っているエステルだ。グリアは、電龍の電腦防壁の詳細を知っていたため、彼らに利用されている。

霧島の真意

霧島は今回の事件の首謀者ではあるが、純粋に『イヌ』のスタイルに尊敬に似た念を持っている。

この言葉は、嘘でもあり、本心でもあるのだ。

●トーキー：ブラックボックス

登場：他のキャストの登場不可

◆解説

デンタツ

電龍と交流のあった数少ない人物である『トーキー』に、三田茂(*)が彼の死の真相の調査を依頼するシーン。電龍との関係性については、リサーチの最初のシーンで描写される事を伝えておくこと。

◆描写

君が呼び出されたマリオネットの編集部は、いつも以上に騒然としていた。右往左往するトーキー達。君を迎えた三田茂は胃が痛そうな顔をして口を開く。

▼セリフ：三田茂

「『トーキー』、よく来てくれた。お前さんに、頼みたい事があるんだ」

「嫌というほど耳に入っているかも知れんが、電龍が死んでからというもの、この街は大騒ぎだ」

「彼の死についての真相を調べようと、メディア中が躍起になっちゃいるが……正直、手詰まりさ。元々謎だらけな人物なのに、今回は警察からも管制がかかっていて、情報が一向に入ってこない」

「『トーキー』、ヤツと顔を合わせた事があるのは、お前さんだけなんだよ。この事件、引き受けてもらえんかね……？」

◆結末

トーキーが依頼を受けたら、費用として1ゴールドを渡してシーン終了。

●ニューロ：消えた新曲

登場：他のキャストの登場不可

◆解説

『ニューロ』のオープニング。電龍のプロデューサーだった佐村和哉(*)から、彼が遺したはずの新曲データのサルベージを依頼される。

◆描写

CME。かつてはアマデウス、今は電龍やメロディを擁している、N◎V A最大のレコード会社だ。CME と関わりの深い“ソウル・フィクサー”からの依頼。デカイビズになりそうだ。

▼セリフ：佐村和哉

「ご存じの通り、数日前に起きた事件でCME は大きすぎる損害を受けました。電龍がCME にもたらす利益はあまりにも大きかった」

「損害を受けたのはCME だけじゃない。僕も、そしてN◎V A中の市民がそうだ……電龍は、新作の発表を控えていたんですよ。しかも彼曰く……“今までで最も自信のある出来”との事でした」

「しかし、彼はその新曲を発表する前に殺されてしまった。彼の自宅のトロンには、新曲と思しきデータは残されていなかった」

「既に、その新曲のプロモーションにむけて動き始めてしまっていた……というのがありますが。何より、彼にそこまで言わせるほどの新曲を、この耳で聞けないのが耐えられないのです」

「失われた新曲の在り処を探し、サルベージをお願いしたいのです。報酬は、CME が保障します」

◆結末

佐村は依頼料として前金1ゴールド、成功で1プラチナムを提示する。依頼を受けたらシーン終了。

三田茂（みた・しげる）

報道企業マリオネットの社長。『TND』p53 や『TNC』p66 を参照のこと。なお、キャストの雰囲気には合わないのであれば、この役どころはN◎V Aスポの九条などでも構わない。

佐村和哉（さむら・かずや）

敏腕のフリープロデューサー。彼はフリーだが、CME と何かと関わりが深い。近年はメロディのプロデューサーとして有名だ。

電龍のプロデューサーも、彼である。詳細は『STL』p51 や、『OTE』p157 参照。

●フェイト：盲目の女性

登場：他のキャストの登場不可

◆解説

『フェイト』が、電龍の恋人を名乗る盲目の女性、梢 美恵理から、死んだはずの電龍の搜索依頼をされるシーン。

◆描写

コン、コンと。君の事務所の扉を控え目に叩く時代錯誤な音が聞こえる。扉を開けると、そこには目を閉じたままの、気弱そうな女性が立っていた。足もとに、盲導犬ドロイドを連れている。

「あ、あの…。『フェイト』さんの事務所は、こちらでよろしかったでしょうか…？」

どうやら、客のようだ。

▼セリフ：梢美恵理

「私は、梢 美恵理と言います。あの、信じて貰えないかもしれないんですが……先日殺されたという、電龍の……恋人だった者です。」

「依頼というのは他でもありません。彼……電龍を、探して欲しいんです」

「彼は殺されて、遺体も見つかったという話ですけど。でも私には、彼が本当に死んでしまったとは思えないんです」

「根拠……というには、乏しいかもしれないんですけど。彼から助けを求めるような音楽が、色んなところから聞こえてくる……気がするんです」

「おかしい事を言ってると思いますよね……」(*)

◆結末

依頼を受ける場合、彼女は依頼料として1 ゴールドを置いていく。雲を掴むような話である事を演出したらシーンエンド。

梢の依頼について

もし『フェイト』が彼女をいぶかしんだり、頭のおかしい子だと思った場合、とりあえずは外面だけでも依頼を受けてもらい、後のち梢のリサーチをしてもらうと良い。(電龍の本当の恋人であった事が明らかにになるからだ)

リサーチフェイズ

RESEARCH PHASE

■クライマックスへの条件

事件の黒幕がブラックハウンド公安4課である事を突き止めたらクライマックス。

●トーキー：伝えたい思い

条件：リサーチの最初のシーン

登場：他のキャストの登場不可

◆解説

過去回想。『トーキー』と電龍^{デンタツ}の出会いのシーン。電龍^{デンタツ}という男の実態を描く。気弱で自信が無く臆病者な、オドオドとした男が、彼の本来の姿だ。

◆描写1

それは君が、電龍^{デンタツ}と初めて出会った時のこと。

彼が初めてインタビューに応じる、という話があった際、数いるトーキーの中から、芸能担当ではない君がわざわざ名指しで選ばれたのだった。

彼の自宅は、銀行の金庫のような過剰なセキュリティに守られており、家主の元へ辿り着くだけで一苦労だった。

プロデューサーですら見た事の無いという彼の姿は、予想とは反して凡庸^{ぼんよう}で、妙にオドオドした自信の無さそうな目の男だった。

▼セリフ：電龍

(『トーキー』が入室した音に)「(ビクッ) …ヒッ!!」

「あ、ああ、『トーキー』さん、か。す、すまない、出迎えに行けなくて。と、遠かっただろ……?」

「げ、幻滅、した、かな。ぼ、ぼぼ僕は、その、酷く臆病で、これだけのセキュリティがないと、その、おちつかないんだ」
(名指しで自分が選ばれた理由を聞くと)「そ、その、君に憧れていたんだよ。君の映像、いつも見てる」

「君は、すごいよ。この街の、悪徳や、その、絶望を前にしても、正々堂々と立ち向かって、真実を広めて、世界を変えていく。ま、まるで、太陽だ」

「僕には、僕にはできない。せいぜい僕にできるのは、こんな安全な部屋の中で、社会への不満を、曲にして、ぶつけるくらいのもんだ……。臆病なんだ」

「で、でも、君の映像を見て、知ったよ。この街って、色々な人がいて、その、す、すごく、面白い、って」

「これからはさ、そ、そういうの、曲にしたいなって、思ってるんだ」

◆描写2

インタビューもひと段落ついて、君が席を立とうとしたとき、ふと、電龍^{デンタツ}が君を呼び止めた。

▼セリフ：電龍

「あ、あのさ。これは、オフレコで頼みたいんだけど……今、新曲を書いてるんだ」

「今度のは、自信作、なんだ。出来上がったら……その、君に二番目に聞いてもらいたいと思う。そしたら、それを、君の手で、世に広めてくれないか？」

(一番目は誰かと聞かれると、顔を真っ赤にして)「君は、ぶ、無粋、だなあ！ ……素敵な人に、出会ったんだ。こ、こんど、君にも、紹介するよ」

◆結果

彼との会話を終えたらシーンエンド。

「●伝えたい思い」

このシーン中に、電龍に関するリサーチを行わせてもいい。

●イヌ：法犬のスタイル

条件：【霧島宏充】についてリサーチした

登場：他のキャストの登場不可

◆解説

こちらも過去回想。霧島宏充という男（本事件の黒幕）のイヌとしてのスタイルを描く。霧島宏充は法と秩序を何より重要視し、大を救うためであれば小を容赦なく犠牲にする男だ。尚、このシーンは同時に『イヌ』のスタイルも描く事を目的としている。描写はキャストに合わせて適宜変えるとよい。(*)

◆描写

数年前の連続爆弾テロ事件での事。捜査部隊の中で、誰よりも早く犯人を追いつめた君に、上層部からのコールがかかる。

「公安の霧島警視監だ。『イヌ』 巡査、犯人は既にアーコロジー内に仕掛けられた爆弾の起爆スイッチを持っている。起動される前に、即座に犯人を射殺しろ」

しかし犯人は、小さな少年を人質に取っていた。
「多くの命を犠牲にするわけにはいかない……少年ごと射殺しろ」
(※霧島に逆らって少年を助けると)

助け出した少年の服の中には、爆弾が巻きつけられていた。犯人は、人間を爆弾に仕立てたテロを楽しむ最悪の愉快犯だったのだ。

▼セリフ：霧島宏充

(事件解決後)「貴方の判断で多くの人命が救われた。一人のイヌとして、貴方に敬意を払う」

「しかし、逆に貴方の命令を無視した身勝手な判断が、多くの人を危険に巻き込む可能性があったという事……それを忘れるな」

「……一つ、尋ねてもいいか。貴方が、何故ブラックハウンドに入隊したのかを」

(答えた)「……そうか。『イヌ』、貴方の事は、覚えておく」

◆結果

彼と『イヌ』のスタイルの違いを演出し終わったらシーンを閉じること。

「●法犬のスタイル」の描写

このシーンで描かれる過去の事件は、今回の事件とは全く関係がない事は、事前にプレイヤーに伝えておくこと。

●ニューロ：死者は歌わない

条件：『イヌ』と『ニューロ』が合流した

登場：〈社会：警察〉 15

◆解説 1

『イヌ』の手引きで、ブラックハウンド基地内に収容されている電龍^{デンタツ}の遺体（義体）について調べるシーン。【電龍^{デンタツ}の遺体】に関してのリサーチを行わせること。成否の如何に関わらず、判定が終わったら描写 2 へと進む。

◆描写 1

ブラックハウンド基地内の霊安室。そこには、殺された電龍の義体が収容されていた。部屋に入ろうとする君達を、鑑識課のバイオロイドが制する。

▼セリフ：バイオロイド（プロンプト）

「困ります。ここは、一般人は立ち入り禁止です」
「彼の義体を調べても、何も分からないと思います。私たち鑑識課も、散々調べましたから」
（引き下がらなかった）「そこまで言うなら……少しだけです。無駄だと思いますが」

◆解説 2

判定後、エステル・コリンズが登場し、『イヌ』を諷める。彼女は『ニューロ』が電龍^{デンタツ}殺害の容疑者の一人だという。《制裁》^{パニッシュ}が使用され、『ニューロ』は今後、ブラックハウンド基地内には出入り出来なくなる。（社会戦ダメージ「5：汚名」の効果だ）

◆描写 2

「貴方たち、何をしているの！」
電龍の遺体を洗う君達に突如、鋭い声が浴びせられた。

▼セリフ：エステル・コリンズ

「フリーズ、そのニューロ、即座にアウトロンしなさい！」
「貴方は……機動捜査課の『イヌ』ね。私は組織犯罪課の、エステル・コリンズよ。民間人を基地内に連れこむなんて非常識じゃないかしら？」
「それによく見れば、一緒にいるのは『ニューロ』じゃないですか！ 彼は容疑者の一人よ！？」
「……まあ、数いる候補の一人でしかないですけど。でも、可能性が残っている以上、彼に捜査を手伝ってもらうなどと、もってのほかです」
「即刻、退去しなさい。『イヌ』、貴方も責任をもって見張ってなさい！」※《制裁》を使用

◆結末

神業の効果で強制的に追い出され、シーンエンド。ちなみに、この《制裁》^{パニッシュ}による社会戦ダメージは、治療しなくてもシナリオ進行上は問題無い。（*）

《制裁》を治療しなくても……

電龍の遺体に関するリサーチはこれ以降行えなくなるが、この情報を得なくても他のリサーチを進める事で、電龍の遺体の秘密に辿り着く事は可能だ。この事はプレイヤーに伝えておこう。

●トーキー：予定された死

条件：グリア・シュワンの[アドレス]に向かった

登場：〈社会：N◎V A、企業、警察など〉 10

◆解説

キャスト達がグリア・シュワンの元を訪れるシーン。グリアはエステルによりゴーストハッキングを受けており、操られている。(*)

ある程度グリアと会話をした後、そこに木崎が乗り込んで来る。木崎がグリアを逮捕しようとする、グリアは自殺を図る。

◆描写 1

薄暗いラボの中、主任室と書かれた部屋に彼はいた。真昼間だというのに薄暗い部屋の中、机に座ったままの白衣姿の男。

グリア・シュワン……電龍専属の義体技師。窓からの逆光に照らされて、彼の表情は伺えない。

▼セリフ：グリア・シュワン

「何だね、君たちは」

(電龍の死について聞いた)「……もう感付かれたのか。全く、悪い事はできないものだな」

(殺したのかと問い詰められると)「最早言い逃れもできそうにない。そうだ、アイツは私が殺した」

「売れてからというもの、アイツは変わった。もっと良い義体技師を雇うと言いはじめた。私がいままでずっと、親代わりに育ててきてやったのに、あの恩知らずめ」

◆描写 2

そこへ突如、数人の警官隊が突入してくる。部隊を率いている男がグリアに銃を向ける。

▼セリフ：木崎

「フリーズ。話は聞かせてもらった、グリア・シュワン。お前を電龍殺害事件の犯人として逮捕する」

「機捜の『イヌ』か。俺は殺人課の木崎だ。俺たちより先にこいつに辿り着くとは、流石だな」

「さ、大人しくお縄になりな」

▼セリフ：グリア・シュワン

「悪いが、私は見世物になる気は無いのでね……」

◆結末

グリアは机から銃を取り出し、こめかみに発砲する。キャストが何もしなければ、彼は死亡する。

キャストが防御神業などでそれを防いだ場合、グリアは発砲時の衝撃で気を失うが、その間際に一言「^{デンタツ}電龍……」と呟く。

グリアが生き残った場合、木崎は《^{パニッシュ}制裁》で「17：逮捕令状」を与え、シーンから退場させる。(*)

操られている

ゴーストハッキングとは、他者の意識そのものを則るハッキング行為のこと。操られている事実はプレイヤーに伝える必要はないが、もしプレイヤーが感付き、見破ろうとした場合、《完全偽装》が使用されていることを宣言しよう。キャストがこれを打ち消そうとした場合、その前に警官隊を乗り込ませ、描写2にうつす。

キャストたちがこのシーンで起こした行動にはなんらかのボーナス（グリアが操られていた事実が明らかになる、グリアが《タイムリー》をキャストのために使う、など）をあげるべきだろう。だが、シナリオ進行上、一度グリアは逮捕される必要がある、それらの適用は逮捕後、物語の後半にすること。

《制裁》で退場させる

余計な事を吐かせない為だ。尚、ここでこの《制裁》を打ち消したとしても、彼はゴーストハッキングを受けていた間の記憶を失っているので、黒幕の正体は明らかにはならない。

p49のグリアの設定の項目も参照のこと。

なお、ここで木崎が《制裁》を使っていると、クライマックスでの必要防御神業が1枚減る。(《制裁》が残っている場合、即殺神業として使用するからだ。具体的な方法は木崎のデータを参照)

●ニューロ：偽りの収束

条件：「●予定された死」の次のシーン

登場：〈社会：N◎V A、警察、メディア〉 10

◆解説

デンタツ

電龍殺害から始まる一連の事件が“見かけ上の”終りを告げるシーン。このシーンで、『ニューロ』は佐村から、回収された新曲データを入手する。

◆描写 1

街頭モニターに、臨時ニュースが流れる。電龍殺害事件の犯人逮捕のテロップに、街ゆく人たちが釘付けになる。

▼セリフ：アナウンサー

「緊急速報です。先ほど電龍殺害事件の犯人が逮捕されました。犯人は電龍の専属義体技師のグリア・シュワン。犯行動機は個人的な私怨であると思われています」

（グリアが死んでいる場合）「犯人は警官達が拘束しようとした寸前で自殺したとの事です」

「電龍の死後、謎の失踪を遂げていたニューロキッズ達も次々と帰還しており、事件は一応の集束を見せたようです」

◆描写 2

モニターを見上げる『ニューロ』の元に、コールが入る。佐村和哉からだ。

▼セリフ：佐村和哉

「ニュースは見ていますね？ 新曲データは、犯人が持っていたようです。外部記憶端子から回収されたものが、我々の元に届きました」

「本日、電龍追悼特番にて、その新曲を配信する事が決まりました」

「貴方はこの曲を聴く権利があると思いますので、データを渡しておきます。くれぐれも、一般公開までは流出は避けてください」

（本物のデータなのかと問われると）「……曲は、彼の物に間違いありませんよ。“いつも通り”、他者には決して真似できない芸術的な作品です（少し言い淀む感じで）」(*)

◆結末

ニューロは〔新曲データ〕を入手する。以降、【帰ってきた失踪者】【帰ってきた新曲データ】がリサーチ可能に。

このシーンの最後に『イヌ』は基地への帰還命令をうける。次のシーンへ。

●イヌ：首輪

条件：「●偽りの収束」の次のシーン

登場：他のキャストの登場不可

◆解説

捜査本部を撤収するブラックハウンド。『イヌ』が単独でも捜査を続行しようとした場合、霧島はその行為をブラックハウンドの警官として相応しくないといい放ち、《制裁》^{パニッシュ}で捜査権限を奪う。

◆描写

ブラックハウンド基地、電龍殺害事件捜査本部。そこでは、まるで事件が解決したかのように、機材の片付けや人員の撤収が行われていた。

▼セリフ：霧島宏充

「ご苦勞様でした、『イヌ』。事件は無事に解決しました。では、速やかに通常業務に戻りなさい」

（拒んだ）「貴方は何を言っている？ 終わった事件に貴重な人員を割ける程、この街は平和ではない」

（更に拒んだ）「イヌにあるまじき無秩序さ……貴方はの行動はもはや暴走だ。もう一度だけ言う。速やかに通常業務に戻れ。聞けぬのであれば……」

（※《制裁》を使用）「貴方には、ブラックハウンドの猟犬たる資格は無い」

◆結末

『イヌ』に社会戦ダメージ「18:権力剥奪」が与えられる(*)。霧島が『イヌ』から黄金のバッヂをむしり取り、シーン終了。

言い淀む感じで

佐村は帰ってきた新曲データに違和感を感じてはいる。しかし、その正体を明らかにできない為、強く作品を否定できないのだ。

社会戦ダメージ「18：権力剥奪」

効果は「治療されるまで、【外界】の制御値が0になる」だ。

●フェイト：隠されたメッセージ

条件：新曲データ入手後、梢美恵理を訪ねた

登場：〈社会：N◎VA、メディア_{など}〉 10

◆解説1

新曲データ入手後に、梢のアドレスに向かうと発生するイベントシーン。このシーンが発生すると、自動的にクライマックスに突入するため、準備が不十分であったり、やり残したことがある場合は、先に済ませるようにプレイヤーに伝えること。

梢は自分の家にはおらず、グリーンエリアのとあるセーフハウスを訪れている。キャスト達は彼女に会いに、そこへ向かう事になる。

◆描写1

新麻布にひっそりと建つセーフハウスに、梢はいた。そこは不思議な空間だった。ただっ広い室内には音響機材だけが置いてあり、それ以外は完全に電腦から隔絶されている。そして、足音一つすら体中を包み込むように響き渡る完全な音響効果を実現した造り。(*)
「ここは……私とあの人が会う時によく使っていた部屋なんです」

▼セリフ：梢美恵理

「犯人が、見つかった、そうですね。……グリアさんの話は、彼からもいつも聞いていたので、未だに信じられません」
「(新曲データを渡した) これが……彼の残した、曲。——聞いても、いいですか」

◆解説2

梢が新曲データを聞くと、データの中に何かメッセージが隠されているらしい事が分かる。これは電龍が^{デウス・エクス・マキナ}《電脳神》で新曲データに忍び込ませたものだ。^{トゥルース}《真実》を使用する事で、隠されたメッセージの暗号を読みとき、この事件の黒幕の正体と、彼らの意図について知ることができる。(*)

◆描写2

梢は、静かに曲に耳を傾ける。曲を聞き終えた彼女は、静かに首を横に振った。
「違います……確かにこれは、あの人が作った曲にそっくりです。でもあの人は、こんな意志を曲に込めたりしません。……こんな、無理やりに人を従わせようとする様な曲を、あの人は作らない」

▼セリフ：梢美恵理

「……あれ。ちょっと待って下さい。何……？」
「何か、曲の中に隠されてる……彼の意識が混じっている……これは……暗号？」

▼セリフ：電龍（曲の中に隠されていた暗号）

「違う……こんなの、僕が作りたい曲じゃない」
「でも奴ら、無理やり僕の脳を操って……曲を作らせて……このメッセージを滑り込ませるだけで精一杯だった……」
「こ、怖いよ……でも、こんなの、放っておけない……こんな曲、世に流しちゃ、いけない。色んな人が、色んな事を考えてるから、この街は面白いんだ。皆が同じ考えを強要されたら……それは、死んでるのと同じだ……ッ！」

◆解説3

^{トゥルース}《真実》が使用されたら【事件の黒幕と、その目的】の情報を開示すること。

事件の真実に辿り着いたら、キャスト達の口を封じる為に公安4課が突入してくる。

◆描写3

突如、セーフハウスの中になだれ込んでくる無数の足音。あっという間に周囲を包囲され、全ての出口が封鎖される。手馴れた、プロの集団。

『イヌ』は見覚えがあった。それは、公安部の制圧チームだ。

外部に連絡を取ろうにも、このセーフハウスは電腦から隔絶されている。絶体絶命の状況。

▼セリフ：霧島宏充

「辿り着いてしまったか。残念だ。貴方達を排除せざるを得なくなった」

◆結末

速やかにクライマックスシーンへ。

言い淀む感じで

佐村は帰ってきた新曲データに違和感を感じてはいる。しかし、その正体を明らかにできない為、強く作品を否定できないのだ。

社会戦ダメージ「18：権力剥奪」

効果は「治療されるまで、【外界】の制御値が0になる」だ。

クライマックスフェイズ

CLIMAX PHASE

●ハンザイする秩序

◆解説

霧島たちの企みに気付いたキャスト達の口を封じる為、強襲をかけてきた公安4課と対決するシーン。梢美恵理はシーンには登場するが、戦闘からは除外される。(攻撃の対象にはならない)

霧島は『イヌ』に対して《神の御言葉》^{ゴスベル}を使用し、説得しようとする。精神ダメージ「17:士気喪失」を与える(*)。これを防ぎ、霧島に返答をしたらカット進行へ。

◆描写

君たちのいるセーフハウスを襲撃してきたのは、ブラックハウンド公安部、公安4課の隊員たちだった。周囲を完全に包囲され、銃を突きつけられる。この事件の黒幕……“法犬”霧島宏充が、静かに口を開いた。

▼セリフ：木崎

「全員動くな」

▼セリフ：霧島宏充

「『イヌ』 巡査……以前から、貴方に尋ねたいことがありました。貴方は、この街の現状について、どう考えていますか？」
「増え続ける犯罪、2秒に1人は無^{むこ}辜の民が、心無い犯罪者の手により命を落としている。レッドエリアをうろつくストリートキッズは働く事もせずにその場の快楽に没頭し、レッガーたちは下らない勢力争いで市街を戦場に変える」
「この街の混沌は、大きくなりすぎた。『イヌ』、貴方ならば分かるだろう。この街の有様が以下に崩壊しているかということ。警察組織の本分である、“犯罪の抑止”が、そもそも成り立たなくなっている現状を」

「この街の混沌を助長してきた電龍の曲を使い、皆の心に法と秩序を植え付け、世界を正す……この街を死の病から救うには、それしかない」

「貴方もこの街を、“どうにかしなければ”と考えていたはずだ。違うか!？」

(否定した)「警察とは、街に秩序をもたらす為の機関だ。しかし、君はその在り方に混沌を選ぶというのか？」

「残念だ……だが」

「多くを救うためには、少数を切り捨てなければならない。申し訳ないが、貴方たちは、ここで切り捨てる。……やれ!」

▼セリフ：エステル・コリンズ

「可哀想な人たち。霧島課長の崇高な理念を理解できないなんて」

「貴方たちのような身勝手な行い、まとまりのない思想が、この街を滅ぼす」

「人は社会性の生き物よ。秩序に従って生きることを忘れたら、それはもう動物と同じだわ」

◆カット進行

敵は以下の通り。

近距離 : 木崎 : AR3

中距離1 : 霧島宏充 : AR2

プロンプト : AR2

中距離2 : エステル : AR3

キャストは全員で1エンゲージ。中距離1と中距離2は別のエンゲージだ。キャストの戦力が十分な場合、公安4課バックアップチーム(『MDI』p82, KNIVESのオペレータートループ相当)を20人×1グループほど追加してもよい。

戦闘終了条件は敵の全滅、あるいは無力化である。

尚、電龍^{デンタツ}を救うためには、プロンプトに対してデウス・エクス・マキナ《電脳神》^{デウス・エクス・マキナ}などを使用し、《タイムリー》を打ち消す必要がある。(*)

▼セリフ：霧島宏充(戦闘終了後)

「……私たちを倒そうと、無駄だ。今まさに、私たちの悲願は達成される!」

◆結末

画面に、夜の街角の街頭DAKが映し出される。電龍追悼特番が流れ始めたところで、クライマックス2シーン目へ向かうこと。

「17:士気喪失」の効果

神業で治癒するまで、戦闘に参加できない。

《タイムリー》の打ち消し

この打ち消しに対し、敵は妨害を行わない。目的の曲を作り終わらせた今、電龍は用済みだからだ。

神業合戦になるのをプレイヤーが恐れた場合、この事は伝えて良い。

●トーキョーN◎VA、愛すべき街

◆解説

^{デンタツ}電龍追悼特番が始まる。CMEの手により、N◎VA中に偽りの新曲が流れる。これにより^{デンタツ}電龍が使わされた^{ゴスベル}《神の御言葉》の効果がN◎VAの全市民に拡大してしまう。

^{デンタツ}電龍を救っている場合、彼の真の新曲を^{エクスポーズ}《暴露》で割りこんで公開する事により、上記の効果を打ち消す事ができる。

◆描写1

街中から、ニューロビートが聞こえ始める。^{デンタツ}電龍の、追悼特番が始まったのだ。彼が残した新曲と銘打たれた、偽りのニューロビートがN◎VAの街に響き始めた。

▼セリフ：電龍

「『トーキー』、こ、これが、本当の、新曲だよ」

「初めての、自信作なんだ。笑っちゃうぐらい、不器用な造りだけど、さ」

◆描写2

急に切り替わった街頭 DAK に、街中の人々が怒声を上

げる。だが、そこから流れ始めた音楽を聞き、その声は次第に静まっていった。

その曲は陳腐で、まるでいままでの^{デンタツ}電龍の曲とは違っていた。しかし、この街の混沌を、可能性を、人間を愛する真摯な想いが、その曲には綴られていた。

▼セリフ：街の人々

「おい、なんだこの曲……」

「電龍の新曲の最中だぞ！ 邪魔すんなよ！！」

「ていうかコレ、誰の曲？ 古臭い。今時流行んないでしょ、こんなCDな曲」

「でもさ……何だろう、この感じ」

「暖かい、曲……」

◆結果

N◎VAは再び、混沌の街へと戻る。しかし、きっと、今までとは何かが変わっているはずだ。

エンディングへ。

クライマックスフェイズ



CLIMAX PHASE

各キャストとこれまでの物語に相応しいエンディングを演出すること。ここでは一例を示す。

●ニューロ：新たな鼓動

◆解説

『ニューロ』のエンディング。CMEから報酬を受け取る。今回の事件に関して、佐村と振り返る。

◆描写

あれから、次第に事の真相が世間に明らかになっていき、人々は電龍の帰還を喜んでいた。

報酬を受け取りに来た君を、佐村は恥ずかしそうな表情で迎えた。

▼セリフ：佐村和哉

「やあ、『ニューロ』。今回はご苦労様」

「どうやら今回、僕は事件の大きさに惑わされて、自分のスタイルを見失っていたようだ。自分のセンスが信じられなくなったら、音楽家として終わりだっていうのにね。恥ずかしい限りだよ」

「新曲、発売が決定したよ。ただ、今までみたいな鮮烈な曲じゃないから、爆発的な売り上げは期待できないと思う」

「君は、この曲をどう評価する？」

「僕は、この曲、好きだよ。心からそう思う」

◆結末

成功報酬として、1 プラチナムがCMEから振り込まれる。去り際、ふとウェブに耳を傾けると、まだ誰も聞いたことの無い、新たなニューロビートが生まれる音を感じる。

『ニューロ』が演出を終えたらシーンを切ること。

●フェイト：微笑み

◆解説

電龍を探しだしてくれた事を、梢に感謝される。

◆描写

コンコンと、事務所のドアを叩く時代錯誤な音が聞こえる。扉を開けると、盲導犬ドロイドをつれて、微笑みを浮かべた女性が立っていた。

お菓子の包みを君に渡ししながら、彼女は君に感謝の言葉を告げた。

▼セリフ：梢美恵理

「『フェイト』さん、先日は、本当にありがとうございました」
「警察も、他の探偵たちも、誰も私の言葉を真に受けってくれなかった中、『フェイト』さんだけが、私の声を聞いてくれました。そして、あの人を助けてくれた」

「もしよかったら、これを受け取って下さい。……招待状です、結婚式の。彼から、プロポーズされたんです」

「『フェイト』さんに、是非来てほしいんです」

◆結末

梢はそう言って、幸せそうに微笑む。『フェイト』が返答を返したらシーンエンド。

●トーキー：太陽の元へ

◆解説

新しく義体換装を終えた電龍が、自分の足で（！）君の元まで出向いてくる。

◆描写

待ち合わせのカフェテラス。君が飲みものを飲んでいると、いかにも挙動不審な巨体の男がオドオドと近づいてきた。ローブのような外套を頭から被っていて、見るからに妖しい。

▼セリフ：電龍

「い……居たぁ………」（安堵したようにへたり込む）

「や、やっぱり、外は慣れない……太陽は、ぼぼぼ、僕には、眩し過ぎる」

「礼を、言いに来たんだ……ウェブ越しでも言えるんだろうけど……なんかさ、ちょ、直接言いに来ないと、意味無い気がして、さ」

「君と出会えて、本当によかったよ。約束も、果たしてもらったし」

「あの曲……あ、あんまり、人気、ない、けど、ね」

「でも、いいんだ。きっと、届けたい想いは、ちゃんと伝達できたから」

「ま、また、出てくるよ。これからは……つ、強く、なんなきゃ、いけないし、さ」(*)

◆結末

どこか誇らしげな表情の電龍^{デンタツ}に、『トーキー』が言葉をかけたらシーンエンド。

●イヌ：災厄の都市

◆解説

いつもと変わらない、災厄の都市の、混沌とした日々。今日も変わらず、この街は犯罪に満ち溢れている。新たな事件現場に向かうパトカーの中で、千早冴子と会話をする。

◆描写

ブラックハウンドに安息の日は存在しない。目まぐるしく起き続ける事件。現場へと急行するパトカーの中で、静かに冴子課長が君に話しかけた。

▼セリフ：千早冴子

「結局、どちらが正しかったのかしらね」

「先日の事件。間違いなく、霧島のやった事は許されざる犯罪よ。でも、同じイヌたるもの、彼の気持ちも、分からなくもない」

「今日もこうして犯罪は絶えない。やり切れなくなることだって、多々あるわ。貴方は彼に対して、どんな信念でぶつかっていったの？」

「……私たちには、目の前の事件を一つ一つ潰していくしか、方法は無いのでしょうかね」

「今回は、貴方に色々教えられたわ」

「さ、行くわよ。貴方が選んだ今日という日よ、そのスタイル、貫いて見せなさい」

◆結末

『イヌ』は事件現場へと駆けていく。その後ろ姿を映しながら、シナリオを終了する。

強くなんなきゃいけないしさ

結婚して、守るべきものができたから、という事だ。
強さには程遠い気はするが、彼なりの前進には違いない。